初期擬洋風建築の天守閣形状塔屋に関する一考察

井上章一

一、擬洋風建築をめぐる学説史的検討

明治初期の大工棟梁たちが、西洋建築をまねて建設した建築は、西洋を志向しながらも、しばしば伝統的な日本建築の造形が残存し、一種の和洋折衷的なたたずまいをしめすため、後世から擬洋風建築とよばれていることは、ひろく知られていよう。本稿がとりあげる第一国立銀行の建築もまた、その典型例とでもいうべき様相を呈しており、そのことで、日本近代建築史に関する多くの書物が、これをとりあげさまざまに論じてきたことも、周知のとおりである。

第一国立銀行は、その名がしめすように国営の銀行だが、建設当初は、三井組による民間銀行としていとなまれ、当時は三井御用所、あるいは為替座三井組などと称していた。竣工のすぐあとで、明治新政府の銀行政策が変更され、その要請におうじて三井組が政府へ売却したために、第一国立銀行の施設として利用されることとなり、一般にも、その後の史家からも、第一国立銀行として認知されるようになったのである。

三井組が自前の銀行を東京の兜町・海運橋のたもとにたてようとしたのは、一八七〇（明治三）年のことであり、じっさいの建設工事はその二年後からはじめられ、一八七二（明治五）年の七月には完成した。だが、約四半世紀後にはあとかたもなく解体され、今日、その姿を実見することはおぼつかず、写真や図面、そして錦絵などをはじめとする絵画類から、往時の様子をしのぶしか、復元的考察をほどこすてだてはない。

一、二階は洋風だが、三階から五階を城郭の天守閣のようにしあげた、典型的な和洋折衷の意匠となっており、そのためもあって、とりこわされた一八九七（明治三〇）年ごろには、建築学会からも

注目され、同学会の機関紙へその写真、および実測図面が掲載されている。「和洋両式交移の時代にありて多いに意匠を奪れたる独特の妙所あり」[1]などと、たとえば以上のように評価されつつ、学会のメンバーへは紹介されていた。建築学会をひきいる辰野金吾も、「明治初年の洋風建築が邦人の手に依つて創作されたる好個の記念物として、浅草あたりに移して保存し度し」[2]と、移築保存のねがいをもらしていたらしいことが、つたえられている。なお、旧第一国立銀行をこわしたあとにたつ新しい銀行建築の設計がまかされたのは、ほかならぬ辰野金吾であり（一八九八年二月起工）、その点で保存の要望をもらしたとされるその言辞には、自らの罪ほろぼしめいたニュアンスもあっただろうことから、すこしはわりびいて考える必要もあるだろうが、その意匠的なおもしろさを評価する声の、学会にあったことはうたがえない。

網羅的な言説史の調査ができていないので、たしかなことは言いかねるが、たとえば、一九一五（大正四）年にも、以下のような発言をのこしたものがあり、旧第一国立銀行をはじめとするいわゆる擬洋風建築が、早くから建築家たちにとってのノスタルジックな鑑賞対象となっていたことを、読みとれよう。

> 此等の建築を撮影して明治初年に滅びたる和洋折衷建築があつたことをつたへる事も尤もな事と思ふと同時に、此の滅びた様式を深くをしむともがらも共に、深く此のかくれたる建築家に敬意を表するのである。[3]

関東大震災によって、明治期以来の文物を大量に失なった東京では、もちろんそれだけが原因ではないが、明治文化研究の気運が大いに高まり、建築界でも、そのながれにのった仕事が出現した。堀越三郎による『明治初期の洋風建築』（一九二九年）が、その代表例であり[4]、ここでは旧第一国立銀行などが、大きくクローズ・アップされている。一九六〇年代からは、近代建築史を専攻する研究者がふえたことにも一因があるのだろう、初期擬洋風建築も研究の俎上へのぼりやすくなり、同時に、いままではかえりみられなかった擬洋風へ、あらたな光をあててみたいという類の、過去の擬洋風評価を黙殺するような言辞も横行しだしているので、あえて、それらがじっさいには一九世紀末ごろから注目をあつめていたことを、強調しておきたい。

ただ、それらの建築を評価する論法には、いくらかのちがいもある。戦前の論者たちは、尚古趣味と意匠の奇抜をおもしろがるところで、それらを評価したが、そしてそうした評価も、基本的には維持されつづけたのだが、加えて、新しい評価が下されるようになってきたことも、書きそえておく必要はあるだろう。たとえば、伊藤ていじが、「無残なる和洋の衝突」ではあるが、「江戸時代のあの因

襲的な建物にたいして抱かれていた欲求不満にたいする発散」と、「伝統にとらわれない爽快さをよみとることができる」[5]とのべて、新時代の意匠であることを強調した。村松貞次郎は、建築技術史的に見ると、「文明開化期の狂い咲き」だが、[6]「不思議なバイタリティーに満ちた建築を見るとき、その棟梁たちこそ、近代的な意味での日本最初の建築家とよんでやりたい」[7]と、歴史上へ位置づけた。

こうした論法の延長上にといっていいだろう、初田亨は、旧第一国立銀行の塔屋部分を構成する城郭の天守閣めいた造形など、伝統的な和風をあらわした部分へ注目し、それらが、「明治以前の建築の社会的地位の象徴」であることを、強調した。[8]さらに、クライアントの三井組じたいが、そういう旧幕時代の権威をしめす建築的表現をもとめ、建築家として、当時の三井ならとうぜん依頼できたはずの西洋人ではなく、日本の棟梁・清水喜助を指名したことも、たんなる洋風建築とはちがう、和風の威信にみちた意匠を該銀行へ加味させたかったからではないかと、想像した。

外国人ではなく清水喜助を選んだのには、和洋折衷建築を三井組が欲しており、清水喜助は、封建時代の建築に用いられた社会的地位の象徴を工作でき、他方で文明開化の象徴である洋風の様式にも当時としてはかなり熟知していたからであると考えられる。[9]

旧幕時代の商人には禁じられ、身分の高い武家のみにゆるされていた建築の造作を、明治の新興ブルジョワジーが欲望していたのだとする見取図は、じゅうらいの史家が、大工棟梁のみの近代に注目していたこととくらべ、施主の側にも近代的な開放感があっただろうことを指摘した点で、一九七七（昭和五二）年の指摘であるが、学界へ新機軸をもたらした位置づけだと、評しうる。もっとも、初田の師にあたる伊藤ていじも、従前から清水喜助に「施主の意向にたいして忠実に答えようとする町棟梁的」な「良心」を読みとっており、[10]また初田じしん、伊藤の指導下にあったこともものべているので、[11]その延長上にもたらされた新解釈だと考えてもいいだろう。

初田は、三井文庫を調査して、該建築の設計図面をつきとめ、完成図面ができあがる前に四度の設計変更、つまり図面は合計五とおりあることを発見した点で、史料発掘の実績を評価されるわけだが、しかし、三井側が旧幕時代の権威をほしがったとする文献記録は、同文庫を精査しても見いだせず、だがほしがったにちがいないと判断したあたりは、かなり蓋然性の高い見解だとはいえ、実証研究から飛躍して、ある種の歴史社会学的想像をめぐらせたという一面があることは、いなめない。いずれにせよ、初田はこのあとも該見解を堅持しつづけており、[12]また学界内にも、これといった反論はなく、おおむね了承されているといっていいだろう。のみならず、藤森照

信のように、同銀行が天守閣めいた造形をとりいれていたことへ目をむけ、「〝自分の家にも、きっと城を〟という執着[13]」がブルジョワ側にあったことを類推し、さらには銀行の前へひろがる兜町一帯が、「城下町[14]」としてイメージされていたとする史家さえ、登場した。

新興のブルジョワが、旧時代の権威を身につけたがったのはたしかだろうし、また、たとえ、初田や藤森らの見解が想像にもとづくものであったとしても、これをくつがえすようなデータの存在しないこともたしかであり、本稿がこれらの見解に反駁することはありえない。だが、はたしてそれだけで、天守閣まがいの擬洋風建築が文明開化期に出現したことを説明しきれるのかというところへ、本稿はこだわり、さらに、旧来の指摘とはまったくちがう、あらたな見取図を提示しようともくろんでいるしだいである。

二、天守閣建築解釈の歴史的展開

日本の近世城郭に特徴的な天守閣は、安土桃山時代から本格的にたてられだした施設であり、それより前の段階だと、類似の建築は見られず、日本建築史上にそのころから突然出現したといった観もあり、ために、古くから、安土桃山時代の来日西洋人、ポルトガル人たちが洋式築城術の技術をつたえたことで、その刺激をうけた日本側でも、それまでの建築的伝統からは逸脱した天守閣が建設しえたのではないかとする臆測を、しばしばよびおこしてきた。さらに、天守閣という名称も、ポルトガル人たちがつたえたキリスト教、つまり天主教のことを連想させ、また、安土桃山時代には天守閣のことがただ天主とのみしるされていたという事実からも、天主教とのつながりが想像され、築城技術のみならず、築城の背景をなす思想面においても西洋からの感化があり、具体的にはキリスト教の影響をうけていたのではないかとする空想がうかんでくる一因となっている。

天守閣の起源を、西洋の築城技術やキリスト教と関連づける着想の、その正確なルーツはつきとめられないが、一八世紀後半から浮上しはじめ、一九世紀に隆盛をむかえたことは、まちがいないだろう。江戸期のいわゆる考証随筆類へ、活字化されたものにかぎって目をとおした、そんな管見の範囲では、青木昆陽の『昆陽漫録』（一七六三年稿）に、「我国ノ城ノ制ハ……織田殿ノ時、南蛮人今ノ城制ヲ伝フトイフ[15]」とあるのが、いちばん早い時期の指摘となっている。これは、築城術の西洋渡来を説いたものだが、キリスト教に関しても、おそらくは一七八〇年代にしるされたであろう『笈埃随筆』（百井塘雨筆記）が、天守閣の起源を「信長切支丹の法を信ずる事深く、其宗の仏を祭れる為に建られたり。故に天守といふ。天守とは其宗の本尊の名なり[16]」と、天主教説で展開させており、一八世紀から語られていたことは、明白である。

ここへ、江戸後期を代表する儒学者のひとりである大田錦城が、

一八二〇年代に執筆した『梧窓漫筆拾遺』から、天守閣の起源説とかかわる部分を、やはりそれまでと同じく西洋からの感化を強調する論調になっているのだが――ひいておく。

西洋人は、家宅を五重七重に作りて、其第一の高層の処に、天主を祭る。信長公……安土に大櫓を立てられて、天主を称す。是天下天主の始なり……実は其第一の上層に、天主を奉祀する故に名付けたるにて、西洋人の真似をしたるなり[17]

日本建築には高層の例があまりないが、西洋では五階建て、七階建てがあたりまえであり、大田はそのことを強調しつつ、天守閣のルーツともくされる高層の安土城が、西洋建築とつうじる点を示唆し、さらに、最上層へは天主をまつっていたときめつけ、そのキリスト教的性格を揚言した。一八世紀後半から、しばしば語られてきた言説でもあり、大田の天守閣解釈じたいに、時代からぬきんでる特異性があったりするわけではないが、それでも、大田はこの着想へいたった経緯をつぎのように語っている点で、興味をひく。

一諸侯の臣の、予が門人、予が少かりし時に、物語せるに、是れはあらはには申し上げがたきことなれど、不思議のこと故申すなり。我国城の天主の上層に、何か怪しき神を安置せり。切支丹の神なりと言ひ伝へたりと。予此言を聞きて、豁然として了悟したり。信長公の天主を安置せられて、天主とは付けられたるなり。諸国の天主も是れと同じ[18]。

何藩の逸話かはわからぬが、ある城の天守閣では、上層にキリスト教の神をまつっていたという、そんな話が、大田の耳へは門人をとおして、「少かりし」とあるから、おそらく一八世紀末―一九世紀初頭のことだと考えられるが――はいってきたらしい。その意味で、天守閣とキリスト教とのつながりは、一部の知識人たちがもてあそんでいた歴史解釈遊戯めいた話なのではなく、ひろく一般にも語られていた、一種の都市伝説でもあったことが、読みとれよう。平賀蕉斎という儒者も、『蕉斎筆記』（一八〇〇年刊）で、信長時代には、「切支丹の宗門行はれける故、上の主には天帝を祭りし所也、故に天主と唱へたり」と、キリスト教起源説を提示しつつ、「肥後の熊本城には、今に仏壇のごときもの有けると也、学丹居士の咄也[19]」とつけ加え、キリスト教の祭壇らしいものが城内にもうけられているという噂のあったことを、書きとめており、都市伝説としてのひろがりがしのばれる。

洋式築城術の伝来説と、天守閣の天主教起源説は、その後も語られつづけ、明治時代になっても、一般の史書は、「天主閣トハ天主教ヲ奉スルニヨリテ名ク[20]」、「天主閣とは、もと天主といふを祀りた

る楼閣にて[21]」、「築城法ハ多ク洋式ヲ執リ[22]」などという記述を、流布させていた。明治期を代表する国語事典の『言海』（一八九一年）も、「天主教ヲ信ジタレバ、或ハ、天主ヲ祀レルモノナラムカ[23]」と、天守閣のキリスト教起源説を紹介し、また実用的に重宝がられたという点では類似書のなかでもきわだつ『伝家宝典明治節用大全』が、「天守……始は楼上に耶蘇の天主を祭りたれば天主楼といひし[24]」という解釈をとるなど、この天守閣認識が、他の諸理解を圧倒して普及していたことは、明白である。

キリスト教の関与説が、歴史研究の場で最初に否定されたのは、田中義成が一八九〇（明治二三）年に発表した「天守閣考」であり[25]、洋式築城術の伝播論がくつがえされるのは、大類伸の「本邦城櫓並天守閣の発達」（一九一〇年）をまたねばならなかったわけだが[26]、わざわざ学術雑誌へ論文を書いて通説の論破をこころみようとする学者が出現するぐらいに、一八世紀後半以来の西洋文明との遭遇を力説する天守閣解釈は、猖獗をきわめていたといえるだろう。田中や大類らの研究が世にだされてからは、一般の認識もしだいにかわり、とりわけ一九三〇年代以後は、近世城郭の天守閣を、外国の影響からきりはなして位置づけ、純粋な固有日本文化の産物としてあつかうことが、当然であるかのようになっていく[27]。

内藤昌が、一九七四（昭和四九）年から、安土城の天守閣に、ポルトガル人たちを経由して、ヨーロッパの教会建築が、空間構成上のヒントをあたえた可能性に言及しだしたことは、よく知られていよう[28]。ジャーナリスティックにも、たいへんな反響をよんだ仕事ではあったが、天守閣の解釈史をたどっていけば、一八世紀末以後の学説へ回帰している部分のあることも読みとれるし、逆に、内藤説のもたらしたショックそのものから、二〇世紀以後、西洋とのつながりへ目をむけていた旧説は、しだいにすたれていき、現今では思いだす者もほとんどいなくなっているという状況が、うかんでくる。

三、洋式天守閣観念の可能性

明治初期の擬洋風建築を代表する旧第一国立銀行の塔屋部分が、天守閣状になっていたことはさきにものべたが、この時期の洋風をめざした建築で、類似の形式をとりいれていたものはけっこう存在し、たとえば、第一国立銀行の設計者である清水喜助は、築地ホテル館（一八六八年竣工）においても、天守閣をほうふつとさせる塔を建物の中心へすえており、駿河町にたてた新しい三井組の施設（一八七四年竣工）でも、第一国立銀行ほど顕著ではないが、三階部分の逓減をしめす建築形式や、屋上にそえられた鯱の置物などを見ても、近世城郭とりわけ天守閣からの暗示があることは、うたがえない。もちろん、清水喜助だけが、こういう作風をしめしていたわけではなく、ほかにも、横浜市役所、東京為替会社、蠣殻町米商会所・奥山閣など、建築史家によく知られた文明開化期の擬洋風建築

で、同一の手法は見いだされ、天守閣への接近が当時の建築界においてひとつの流行になっていたことを、知ることができる。

この原因をせんさくした研究は、じゅうらいあまり例がなく、初田亨の解釈がでる前は、桐敷真次郎の、築地ホテル館の塔屋を「おそらく、日本の城の天守や櫓を見て外人が喜ぶのを知り、和洋折衷して案出したものであろう」[29]とする見解が、知られているぐらいであろう。初田亨は、新興の商人が、旧時代の権威を象徴する建築的記号へ執着したとする新解釈を学界へ提出し、現在はこの見方が一般に承認されているものと判断できるが、とにかく、この初田説と桐敷説ぐらいしか、明治初期の擬洋風建築が天守閣の形状へおもむきやすかった理由を説明してくれる議論は、存在しなかったのである。

本稿も、それらの現行説を、積極的に否定するつもりはないが、じゅうらいの解釈とはちがう、新しい見取図を呈示する。一八世紀末から一九世紀にかけて、天守閣を西洋の築城術から感化をうけて成立した建築だとする通念の、ひろく流布されていたことについては、さきにものべたとおりだが、そうした知識をそなえた棟梁や施主たちによって、西洋建築がいとなまれていったからこそ、天守閣の形状は、洋風をめざした建築に付加された可能性があるとする歴史的展望を、ここへしめしておくこととしたい。たとえば、第一国立銀行＝三井組御用所だが、三井は当初、当局へ西洋造りの銀行を建設したいと申請しており[30]、それが許可されてから、天守閣状の塔屋を頂部にいただいた建築は出現したのであって、棟梁の清水喜助や三井側に、天守閣は西洋伝来の建築、極端に言えば一種の西洋建築だとする理解があったことも、想像することができるのである。

もちろん、この解釈は臆測にもとづくものであり、当時の棟梁たちが天守閣を西洋的だと意識したうえで、自分たちのつくる洋風建築へも、その意識を投影させたことのわかる具体的な文献記録は見つかっていないのだが、それでも、当時の天守閣理解における一般的傾向を考えるなら、おおいに蓋然性もあり、かつまた、これまでの解釈にも実証的な根拠はないことを勘案するならば、ひとつの有力な解釈として提出する意味は、十二分にあると考えるしだいである。城郭を意識した洋風建築が、時代の下るにしたがって建てられなくなる理由は、じゅうらいまでの通説どおり、本格的な西洋建築が普及しだすことにあると判断してまちがいないだろう。ただ、文明開化期に数多く出現する、天守閣の形式をとりいれた塔屋のある洋風建築に関する解釈という点で、じゅうらいの見解とともに、一九世紀段階では天守閣が西洋的だと考えられており、そのことが洋風建築の天守閣形式を産出させたかもしれない可能性をも、強調してのべそえておきたいのである。

本題からは少々はずれるが、現在ハワイのマキキに、日本の古城、おそらく高知城だと思われるが――の天守閣を、ほぼそのまま模倣

した教会建築がたっていることへも、注意をうながしておいたほうがいいだろう。この教会は、ハワイ在住の日系人がつどうための施設であり、奥村多喜衛という伝導師の指導で、一九三二（昭和七）年にたてられたものだが、「日本最初の天守閣が天主即ち基督教の神を祭るために造られた史実に鑑み……マキキ教会堂を城の形に建た訳である」[31]と、奥村自身が自伝でのべているように、天守閣とキリスト教のつながりを信じているものは、これは、奥村が一八九四（明治二七）年にハワイへ渡航し、こういう歴史解釈の否定されたことを知らなかったせいでもあろうが……たしかにいたのであり、ましてや、文明開化期の、天守閣と西洋文明をつなげてうたがわなかった時代だと、ごく自然に西洋建築なら天守閣という着想のうかびえただろうことが類推されうるのである。

注

（1）「旧第一銀行写真説明」『建築雑誌』一八九八年七月号。なお、同誌の八月号には、森山松之助の手になる実測図が、紹介されている。

（2）堀越三郎『明治初期の洋風建築』丸善　一九二九年　三三ページ。

（3）大倉直介「惜しい事がある」黒田鵬心編『東京百建築』建築画報　一九一五年　三〇ページ。

（4）堀越前掲書に、「大正の初めより明治文化研究漸く世に現れ……大正の末年に……維新以来の文物に関する史的考究は漸く盛ならんとせり……大震災は……明治文化の史料の大部分を奪ひ去れり……斯かる折に、十数年来蒐集せる明治文化資料の内より明治初期の建築に関するものを整理……一括編纂して発表せんとす」、とある（三ページ）。この仕事が、当時さかんになりだした明治文化研究の一般的潮流とともにあったことが、よくわかる。

（5）伊藤ていじ『日本の工匠』鹿島研究所出版会　一九六七年　二四五ページ。

（6）村松貞次郎『西洋館を建てた人々――日本近代建築史ノート』世界書院　一九六五年　三八ページ。

（7）村松貞次郎『日本近代建築の歴史』日本放送出版協会　一九七七年。

（8）初田亨「海運橋三井組為替座御用所の建築について」『日本建築学界論文報告集』第二五三号　一九七七年三月号　一三七ページ。

（9）同右　一三八ページ。

（10）伊藤ていじ　前掲書　二四五ページ。

（11）初田亨　前掲論文　一三九ページ。

（12）初田亨『東京・都市の明治』筑摩書房〈学芸文庫〉一九九四年　七九ページ。「和洋折衷の第一国立銀行」東京都江戸東京博物館監修『復元　鹿鳴館・ニコライ堂・第一国立銀行』ユーシープランニング　一九九五年　六七ページ。

（13）藤森照信『建築探偵の冒険・東京篇』筑摩書房　一九八六年　二七三ページ。

（14）同右　二七八ページ。

(15) 『日本随筆大成』第一〇回　吉川弘文館　一九二八年　四八四ページ。
(16) 『日本随筆大成・第二期』第六回　日本随筆大成刊行会　四九七ページ。
(17) 『随筆叢書・百家説林』第一〇巻　今泉定介・畠山健　一八九二年　四八ページ。
(18) 同右　四九ページ。
(19) 『百家随筆』第三　国書刊行会　一九一八年　二六九ページ。
(20) 北川藤太『日本文明史』一八七八年　九二ページ。
(21) 物集高見『修訂日本文明史略』大日本図書　一九〇二年　四三二ページ。
(22) 小林鉄之輔『大日本帝国全史』一八九二年　五二〇ページ。
(23) 大槻文彦『言海』
(24) 博文館編輯局『伝家宝典明治節用大全』　博文館　一八九四年　六二五ページ。
(25) 田中義成「天主閣考付多門」『史学雑誌』第一編第二号　一八九〇年一月　二〇ページ。
(26) 大類伸「本邦城櫓並天守閣の発達（第二回）」『史学雑誌』第二一編第四号　一九一〇年四月　二九―三六ページ。
(27) 天守閣の起源をめぐる学説史は、時代精神のうつりかわりとも、密接なつながりをもっており、その詳細については別稿を期すが、とりあえずは現在執筆中の連載「安土城へ、ユリシーズ」（『諸君』一九九五年九月号より）を、参照していただきたい。
(28) 内藤の安土城研究は、内藤昌・油浅耕三「新安土城天守指図について」『日本建築学界大会学術講演梗概集』（北陸）一九七四年一〇月、にはじまり、「安土城の研究」『国華』九八七号、九八八号、一九七六年二月号、同三月号、で集大成され、近著の『復元安土城――信長の理想と黄金の天主』講談社〈選書メチエ〉一九九四年まで、つづけられている。内藤が復元にあたって依拠した池上右平の「天主指図」（静嘉堂文庫所蔵）は、学界のなかで、実施図面としての信憑性が疑問視されており、ヨーロッパからの影響をことあげする見解もオーソライズされているとは、言いがたい。
(29) 桐敷真次郎『明治の建築――建築百年のあゆみ』日本経済新聞社〈新書〉七三ページ。
(30) 初田亨　前掲論文　一九七七年　一三三ページ。
(31) 奥村多喜衛『回顧四十年』一九三四年。